

発話行為理論—文学との関連性について—

西村 智

Speech-Act Theory: Its Relation to Literature

Satoshi NISHIMURA

Speech-act theory, inaugurated by J. L. Austin, focuses on the performative function of language. Although Austin excluded literature from consideration, it is clear that his theory has crucial implications for literary criticism.

キーワード：発話行為、遂行的（言語）、J. L. オースティン、ポール・ド・マン、ジャック・デリダ

Keywords: speech acts, performative, J. L. Austin, Paul de Man, Jacques Derrida

J. L. オースティン (J. L. Austin) によって創始された発話行為理論はその後さまざまに発展させられ、複雑な様相を呈するものになっている。だが、どういう形を取るにせよそれが一貫して問題にするのは、言うまでもなく言語の「遂行的」 (“performative”) 機能、「言葉でいかに事を為すか」ということである。拙論の関心は、この理論の文学ないし文学批評との関わりの問題にある。

オースティンの『言葉でいかに事を為すか』(*How to Do Things with Words*) は発話行為に関する一連の講義から成るが、彼はその第一講で、前置きに続けて次のように述べている。

哲学者たちはあまりにも長きにわたり、「陳述」の役目が、何らかの状況を「描写する」こと、もしくは「何らかの事実を述べる」ことでしかあり得ず、そしてこれを真であるか偽であるかのどちらかとして為さなければならないと仮定してきた。⁽¹⁾

要するに彼は、言語の主たる機能が真偽に関わる「事実確認的」 (“constative”) 用法にあるという従来の哲学的前提に疑問を投げかけることから始めているわけだが、これは文学批評家にとっても注目に値する点である。というのは、文学の言語が認識論的価値を持つとしても、それは純粋に事実確認的なものとは言えないからである。事実確認的言語から目を転じてオースティンが注目するのは、それに対して二義的なものとして扱われてきた言語、すなわち真偽に関係なく何か事を為すために

用いられる言語である。彼はこのいわゆる遂行的言語の重要性に注意を喚起し、これを事実確認的言語と対等関係に置くばかりか、事実確認的とされる言語も少し角度を変えればどれも遂行的なものに見なすことができることを指摘して、両者の関係を逆転させてしまう。とはいえ、これは事実確認的言語なるものが実際には存在しないということを意味しているわけではない。つまるところ問題になっているのは、事実確認的言語と遂行的言語という二つの異なる種類の言語が存在するということでも、どちらか一方しか存在しないということでもなく、どの言語使用も事実確認的機能と遂行的機能の二面性を持っているということである。⁽²⁾ この点をより明確にするために、オースティンは別の一連の用語を使う。すなわち、「発語」(“locutionary”) 行為、「発語内」(“illocutionary”) 行為、そして「発語媒介」(“perlocutionary”) 行為である。⁽³⁾ 何か言葉を発する際、私たちは文法的な文を産出し(発語行為)、そしてそうしながら、あるいはそうすることによって、何か他のことをしてもいる(発語内行為と発語媒介行為)。言語を使用することはこれら三つのすべてないしは少なくとも二つ(発語行為と発語内行為)を同時に行うことであり、いずれにせよいかなる言語使用も少なくとも部分的ないし潜在的には遂行的なものだということである。

ここから生じる問題の一つは、言語使用がその遂行性に不当に脅かされたり汚染されたりする可能性であるが、オースティンはこれにはほとんど注意を払わない。というのは、彼によれば、発話行為は、それがあつた適切な条件の下で真面目に行われた場合に限ってその遂行的機能を首尾よく果たすものだからである。こうなると当然、発話行為としての文学ないし文学における発話行為は、適切な成立要件を欠いたものと見なされ、考察の対象から除外されることになる。

遂行的発話は、例えば、役者が舞台上で口にしたり、詩に持ち込まれたり、独白で発せられたりした場合、奇妙に空虚で効力のないものとなる。これはすべてのいかなる発話にも同様に当てはまることであり、特殊な状況では著しい変貌が生じるのである。そのような状況における言語は、特別なやり方で一はっきりそう分かるように一真面目にではなく、通常の用法に寄生するようなやり方一言語の無力化の理論に委ねられるようなやり方で、用いられているのである。⁽⁴⁾

この観点からすると、文学は現実の発話行為の上辺だけを模倣した実のないものであつて、その虚構性は発話行為としてのその意図が偽装されたものであるということ事実にあることになる。実際、ジョン・R. サール(John R. Searle)は、虚構作品の作者について、「たいていは断言の形式を取る一連の発語内行為を遂行するふりをしていふ」と述べている。⁽⁵⁾ また、リチャード・オーマン(Richard Ohmann)は同様の見方を文学の定義にまで拡大しようとしている。彼が言うには、「文学作品は、通常

の発語内的な力を持たない一連の文から成る言説である。その発語内的な力は、見せかけのものである。」⁽⁶⁾

しかし、発話行為に伴う「真面目さ」のような問題は、決して単純なものではあり得ない。オースティンや彼の追随者たちがこの問題に深入りせずにいられるのは、行為の「意図」やその「主体」を、侵犯されることのない超越的な与件と措定しているからだと思われるが、そうであるとすればこれは明らかに問題である。というのも、一つには、ある行為が真面目に行われているのかそうでないのかを客観的に区別することは必ずしも容易ではなく、むしろそのような区別自体が往々にして問題となるからである。一例として、『ロビンソン・クルーソー』(*Robinson Crusoe*)の序文の中でダニエル・デフォー(Daniel Defoe)が自身を「作者」ではなく「編者」と呼んで述べた次の主張に注目したい―「編者はこれが事実の正確な記述であると考えており、そこには作り事は一切存在しない。」⁽⁷⁾ 作り事であることを否定するこのような断り書きは、レナード・J. デイヴィス(Lennard J. Davis)が指摘するようにイギリス初期小説に特徴的なものであり、一般にその目的は宗教的立場からの批判をかわすため、あるいは写実の効果を高めるためであるなどとして理解されているが、もしそうであるとすれば、そのような否定行為は真面目なものではなく、真面目さを装って為されたものにすぎないということになる。しかし、デイヴィスによれば、問題の否定行為には、当時の小説がまだジャーナリズムから抜け切れておらず、今と違って純粋に虚構であるとは言えないジャンルだったという事実が関係しているという。⁽⁸⁾ この観点から言えば、デフォーが自分の作品を作り事ではないと主張した時、それは彼としては真面目にしたことだったのである。

さらに問題なのは、ある発話行為が真面目に行われようがそうでなかろうが、それが意図や主体から難なく切り離されてしまうことは何ら珍しいことではないということである。これを端的に例証するエピソードが、トマス・ハーディ(Thomas Hardy)の小説『狂乱の群れを離れて』(*Far from the Madding Crowd*)の中にある。ヴァレンタインの日にバスシバはボールドウッドに一枚のカードを贈る。それは「私と結婚して」という言葉で封印されていたが、彼女は単なる悪戯心でそうしただけで、実際には求婚の意図はまったくなかった。しかしボールドウッドはこれをその通りに受け止め、そのせいで人生を取り返しのでないほどに狂わされてしまう。⁽⁹⁾ これが現実世界の話だとしても、誰も不思議だとは思わないに違いない。

こうした問題に重要な手掛かりを与えてくれるのは、ポール・ド・マン(Paul de Man)やジャック・デリダ(Jacques Derrida)のような脱構築批評家による発話行為の議論である。ド・マンやデリダによれば、遂行的言語の本質的な問題点はその予測不能性と制御不能性にある。というのは、言語は、ひとたび使用されると、使用者から独立して言語それ自体の自律性に従って機能するものだからである。これに関連して、ド・マンは例えば次のように述べている。

書記行為は、記号表現の恣意的な力業に与した強奪の契機を常に含んでおり、主体の側からすれば、これは手足をもがれ、首を斬られ、あるいは去勢されるようなこととして経験できるばかりなのである。⁽¹⁰⁾

同様の視点から、デリダは言語の本質が発信者および受信者の不在を前提とするその「反復可能性」(iterability)⁽¹¹⁾—引用の場合のように、本来のとされる文脈や意図とは無関係に機械的なやり方で繰り返し使用できること—にあると主張する。これはもちろん、遂行的言語についても当てはまることである。

遂行的発話は、その言い方が、「コード化」され、反復することのできる発話を繰り返すものでないとしたら、換言すれば、会議を開いたり、船を進水させたり、婚姻を成立させたりするために私が発する決まり文句が、ある反復可能なモデルと一致していると認識されず、したがってそれが何らかの形で「引用」であると認められないとしたら、成功することがあり得るだろうか？⁽¹²⁾

この立場から言えば、発話行為としての文学は現実の発話行為を単に形式の上で模倣するだけでなく、現実において使用可能な発話行為のモデルを提示するものでもあると言えるのであり、したがって文学を、現実の発話行為に対して二義的なものであるからという理由で考察の対象から外すことはできなくなるのである。

発話行為の意図の問題に加えて、オースティンの理論において議論の余地のあるもう一つの重要な問題は、言語の遂行性と事実確認性との間の関係についてである。先にも触れたようにこれら二つの機能は同時的であるが、オースティンが両者の安定的共存を示唆して特に問題含みなものとは考えていないようであるのに対し、デリダはここにも問題点を見出して両機能が決定不能な相互依存的関係にあることを指摘する。例としてデリダが挙げるのは、「独立宣言」である。独立宣言は、独立国の国民の名の下に行われるのであり、その限りにおいて独立国の国民を事実確認的言語の対象となる所与の存在として措定しているが、この所与とされる国民は、独立宣言という遂行的言語行為の結果として存在するのであって、この行為遂行に先立って存在してはいないのである。⁽¹³⁾ 要するにこの場合、発話行為は単に何かを発生させているのではなく、それが発生させるものをあたかもすでに存在しているものであるかのように扱っているということであるが、このことを理解する最も手軽な方法は、文学の言語に目を向けることに他ならない。例えば、ジョージ・エリオット (George Eliot) の『ミドルマーチ』(Middlemarch) は次のように始まる。

ブルック嬢は、地味な衣服を身に着けた時に際立つような美しさを備えていた。彼女の手と手首はとても繊細な形をしていて、飾り気のない袖に包

まれると、イタリアの画家たちの目に映じた聖母マリアを彷彿させた。彼女の横顔や身の丈、そして物腰は、質素な着こなしによっていっそう威厳を増し、そうした装いが地方で流行の服装のそばで見かけられると、最新の新聞記事の中に引用された、聖書や古い詩人からの嘉言であるかのような印象を醸し出すのだった。彼女はたいてい、すぐれて聡明だと言われていたが、その際に言い添えられるのは、妹のシーリアの方が常識的だということだった。⁽¹⁴⁾

ブルック嬢はこの小説の主要人物であるが、現実には存在しない。だから語り手の言葉は、ただ人物を描写しているのではなく、描写しながら同時に存在させてもいるのであり、あるいは存在させながら描写してもいるのである。文学はこのような決定不能のプロセスを利用し、これに基づいて自らの世界を構築しているのであり、この点でも私たちが発話行為の作用を理解するためのモデルを提供してくれるのである。

注

⁽¹⁾ J. L. Austin, *How to Do Things with Words*, ed. J. O. Urmson and Marina Sbisa, 2nd ed. (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1962, 1975), p. 1. この著作を含め、本論における英語文献からの引用（書名を除く）の日本語訳はすべて拙訳である。

⁽²⁾ Jonathan Culler, *On Deconstruction: Theory and Criticism after Structuralism* (London: Routledge & Kegan Paul, 1983), p. 133 参照。

⁽³⁾ Austin, p. 109, 他。

⁽⁴⁾ Ibid., p. 22.

⁽⁵⁾ John R. Searle, *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts* (Cambridge: Cambridge University Press, 1985), p. 65.

⁽⁶⁾ Richard Ohmann, “Speech Acts and the Definition of Literature,” *Philosophy & Rhetoric* 4.1 (Winter 1971): 14.

⁽⁷⁾ Daniel Defoe, “The Preface,” in *Robinson Crusoe*, ed. Michael Shinagel (New York: W. W. Norton & Company, 1975), p. 3.

⁽⁸⁾ Lennard J. Davis, “A Social History of Fact and Fiction: Authorial Disavowal in the Early English Novel,” in *Literature and Society: Selected Papers from the English Institute, 1978*, ed. Edward W. Said (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1980), pp. 120-48. また、拙論「サミュエル・ジョンソンの小説論」『中部大学リベラルアーツ論集』第2号（2020年）：4-5 参照。

⁽⁹⁾ J. Hillis Miller, *Topographies* (Stanford: Stanford University Press, 1995), pp. 123-25, および拙論「バスシバのヴァレンティン・カード—発話行為理論の観点からの考察」『日本ハーディ協会ニュース』第66号（2009年）：1-3 参照。

⁽¹⁰⁾ Paul de Man, *Allegories of Reading: Figural Language in Rousseau, Nietzsche, Rilke, and Proust* (New Haven: Yale University Press, 1979), p. 296.

⁽¹¹⁾ Jacques Derrida, *Limited Inc*, ed. Gerald Graff, trans. Samuel Weber and Jeffrey Mehlman (Evanston: Northwestern University Press, 1988), p. 7.

⁽¹²⁾ *Ibid.*, p. 18.

⁽¹³⁾ Jacques Derrida, "Declarations of Independence," trans. Tom Keenan and Tom Pepper, *New Political Science* 15 (Summer 1986): 7-15.

⁽¹⁴⁾ George Eliot, *Middlemarch*, ed. W. J. Harvey (Harmondsworth: Penguin, 1965), p. 29.